

金子 熊夫

かねこ・くまお二外交評論家、エネルギー戦略研究会会長、EEE会議代表。元外交官、初代外務省原子力課長、元東海大学教授。ハーバード法科大学院卒。80歳。kaneko@eeecom.org



人旅行で、主目的はブラッセルに住む長男一家、とくに2人の孫との交流を深めることだったが、ついでにベルギー国内やチェコのプラハなど観光スポットにも随時足を延ばした。

私事ながら、5月下旬から約1カ月間ヨーロッパへ行ってきた。今回の旅行は全くの個人

時評

ウェーブ

2017.7.7

巨大パノラマを見学したりして、2世紀前のこの日、ナポレオン皇帝麾下(きか)のフランス軍とウエリントン公率いる英蘭連合軍など、両軍合わせて約20万人の将兵が繰り広げた激戦に思いをはせた。わずか1日の戦闘で約5万人がここで戦死したという。

ワテテルローの古戦場で

復帰したナポレオンが、再びヨーロッパの覇権を賭けて、連合軍との決戦に打って出たのだが、いかせん仏軍は、3年前のモスクワ遠征や相次ぐ戦闘による疲弊で戦力的にはやや劣勢と見られていた。そこでナポレオンは敵軍の戦術準備が十分整う前に先制攻撃を仕掛ける作戦を立てていたが、あいにくの悪天候で時間をロスした

ために、到着が遅れていたプロシア軍に英蘭連合軍と合流する時間を与えてしまったことが最大の敗因とされている。さらに、ナポレオンの命令が正確に各師団長に伝わらなかったことも敗因の一つに挙げられているが、電話も電報もなかった時代、天オ的な戦略家にも盲点はあったのだろう。

それにしても、実質的にわずかエルバ島を脱出し、パリで皇帝に

たかもしれない。また、ワテテルロー会戦当時、独立後間もない米ロ国が、米英戦争(1812〜14年)のため仏軍に加勢する余裕がなかったこともナポレオンにとっては不運であった。

思うに、当時も今も、ヨーロッパにおける国際政治ゲームは、仏英独の3カ国の主導権争いと、それに新興大国の米ロがどちら側の味方として加わるかで決定されてきた。他方、島国の英国は、常に仏独を大陸で戦わせ、消耗させることでいわば「漁夫の利」を得ることを外交の基本としてきた。20世紀以降は、徹底的にドイツをたたいたが、それはあくまでもヨーロッパの覇権をドイツ一国に握らせたいためであった。

第2次大戦後は、2度の苦い経験に懲りた仏独が恩讐(おんしゅ)を超えてがっちり手を結び、ついにヨーロッパ共同体(EC)を結成。それが拡大して今日のヨーロッパ連合(EU)に至っているが、当初英国はこれに加盟するかしないかで長年思案した末に、1961年に加盟を申請。ドゴール大統領の「ノー」により10年以上かかってようやく1972年に正式加盟を認められた。

その英国が、昨年6月の国民投票で突然EU離脱を決めたわけだが、今後EUとの離脱交渉は加盟交渉以上に難航が予想される。さらに、トランプ政権下の米ロとの不協和音も高まっている。今やEUの大黒柱となったメルケル独首相と、「第二のナポレオン」ならぬ「金融のモーツァルト」と称される気鋭のマクロン仏大統領の対応がとりわけ注目される。ワテテルローの丘の上でそんなことを考えていた。